

(始良郡隼人町西光寺)

位置と環境

鹿児島空港のある通称十三塚原と呼ばれている標高260mのシラス台地東端近くにある。

調査の経緯

鹿児島臨空工業団地建設工事に伴って、平成8(1996)年から翌年にかけて、県教育委員会が発掘調査を実施した。

遺構と遺物

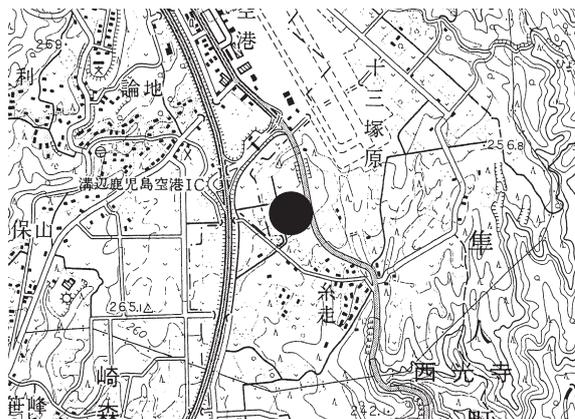
旧石器時代から縄文時代早期、前期、後期・弥生時代終末～古墳時代初頭・平安時代と続く複合遺跡である。

旧石器時代のものは、ナイフ形石器文化期のものと考えられる敲石や石皿状の石器が出土した。

縄文時代のものとしては、まず早期の落とし穴状土坑が1基検出された。また、地点は異なるが、楕円の押型文土器が出土した。

前期該当のものは、16基の落とし穴状土坑が検出された。多くは、台地の南西部へ傾斜していく谷地形を利用したのと考えられる。土坑の埋土中に桜島起源の火山噴出物(P5)と考えられる黄色パミスがみられることから、前期末という時期を想定した。隣接する溝辺町の曲迫遺跡からも同様な土坑が8基検出されている。土器としては、轟B式土器が少量出土した。

後期のものは、岩崎上層式や指宿式と考えられる土器が出土した。後期初頭の土器と考えられる底部



第1図 東免遺跡の位置

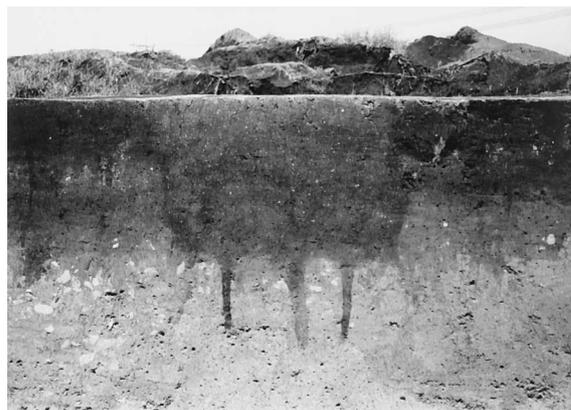


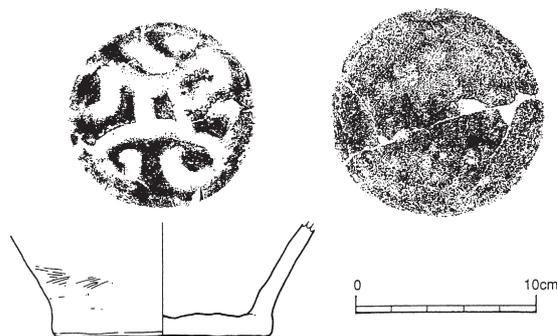
写真2 3号落とし穴状土坑(1)



写真3 3号落とし穴状土坑(2)



写真1 東免遺跡の空中写真



第2図 底部内面に文様のある縄文土器

内面に凹線で文様が施された珍しい資料も出土した。

弥生時代終末から古墳時代初頭のものとしては、いわゆる成川式土器とともに、磨製石鏃や鉄製品などが出土した。成川式土器では、比較的高環形土器が多くみられた。

平安時代のもものでは、掘立柱建物跡3棟（いずれも2間×3間）と土坑2基が検出された。掘立柱建物跡は、いずれも2間×3間をベースとしたものであるが、柱の配置や面積等から1号と3号は類似し

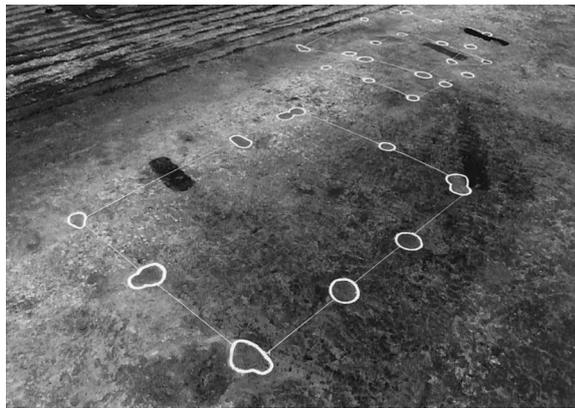
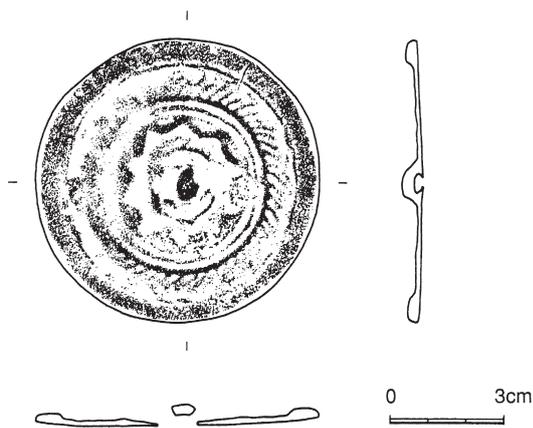


写真4 古代の掘立柱建物跡

た痕跡を示している。

土坑で注目されるのは1号としたもので、内行花文をもつ小形仿製鏡が完全な形で出土した。鏡本体中央に穿孔があり、植物（アオツツラフジ）の紐が残存していた。鏡は、約2千年前に北部九州で製造されたと考えられるもので、表面には赤色顔料を塗彩した状況がみられた。同様な形態の2号土坑も含め、どのような性格のものであったのか注目される。



第3図 小形仿製鏡



写真5, 6 小形仿製鉄の出土状況

古代の遺物には、土師器・須恵器などがあるが、土師器には墨書土器（判別可能なものは「大」のみ）や黒色土器などもみられた。

特徴

・16基発見された縄文時代前期末の落とし穴状土坑は、谷地形を利用した当時の狩猟形態を伝えてくれる貴重な資料である。

・県内における、弥生時代の鏡は発見例が少なく、それだけでも重要なことであるが、平安時代の土坑から出土しており、伝世の理由、その使用方法などが注目される。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管され、鏡は上野原縄文の森展示館に展示されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004「東免遺跡・曲迫遺跡・山神遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（64）

（前迫亮一）